

中国近代思想研究方法序説

川 尻 文 彦

本稿では中国近代思想研究の方法論について私のこれまでの仕事を踏まえながら初歩的な検討を加える。その際、研究史にも言及するが、網羅的なものではないことをあらかじめおことわりしたい。網羅的な研究史の紹介は別の機会に譲る。

一、清末思想研究

思想研究で言えば、ある一人の思想家を取り上げて伝記的な研究を行うことがまず考えられる。思想家個人を研究テーマにした研究は、日本でも依然として主流であろう。日本のみならず、アメリカの学界でもそのような傾向が強かった。^{〔1〕}私が見る所、より積極的な理由としては、ベンジャミン・シュウォルトツの嚴復研究 (Benjamin Schwartz, *In Search of Wealth and Power: Yen Fu and the West*, Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, 1964) やジョセフ・レヴンソンの梁啓超研究 (Joseph R. Levenson, *Liang Chi-chiao and the Mind of Modern China*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1953) のような「成功例」が存在したことが挙げられる。逆に消極的な理由としては、思想家個人を研究テーマにした場合、調べる対象が明白であり、限定的であり、

研究者が短期間のうちに一定の成果を出さなくてはいけない昨今の学界事情においては、ある程度まとまった、「穴のない」研究成果を出すために最善の方法でもあった。中国近代思想を扱った研究では、梁啓超という思想家は主人公、副主人公としてたびたび登場する。私もかつて公表した論文の中で梁啓超に言及することが多かったが、実は伝記的研究を意図したものはなく、意図的に伝記的な研究手法を採らなかつた。逆に、伝記的な研究では捉えることのできない要素の解明を目指している（後述する）。

中国の近代は、清末と称されることがある。清末とは、清朝の末期を意味する。具体的に、何年から何年までという学問的な定義はない。研究者によつて清末という言葉が指す時期は若干の違いがあるが、おおむねアヘン戦争以降の十九世紀後半から清朝の滅亡した一九一一年をイメージするであろう。あるいはより狭くとして、戊戌変法を前後する一八九〇年代の半ばから一九一一年の十数年を想起する研究者もいるかもしれない。いずれにせよ帝政中国 (Imperial China) が徐々に瓦解へと向かつて行く時期である。中国の歴史学界の公式見解によれば、中国の近代はアヘン戦争に始まる。中国はアヘン戦争の敗北に伴い、不平等条約が強制され、西洋諸国に半植民地化された。植民地主義に対する民族主義的な反抗闘争が勝利し、民族の独立を回復した時点（後の歴史の展開から見れば、毛沢東革命がこれに当たる）で次の歴史的ステージに移行すると考えられたのである。^③ その意味で、アヘン戦争以後の近代史は西洋列強による帝国主義の中国侵略に対する闘争の歴史であると考えられ、「反帝国主義」闘争が歴史の課題であったのである。

周知の通り、中国が国際的秩序の中に組みこまれたのは何も近代にはじまることではない。十六世紀以降の大航海時代にもたらされたグローバル化の波は西洋と東洋の垣根を取り払い、世界を「一体化」させたといえる。この大航海時代のグローバル化がもたらしたさまざまな影響、痕跡は今日の日本、中国のいたるところに残っている。しかし、近代以降、別の言葉で言えば「帝国主義」時代以降のグローバル化が中国の歴史にとってこれまでにない意味をもったのは、よく言われるように政治、経済、軍事、文化の面で圧倒的な力をもった西洋が中国の前に登場したこと

である。いわゆる「西洋の衝撃」(Western impact)である。この「西洋の衝撃」の前に、中華帝国はそのレゾン・デートル(存在意義)を問われることになり、軍事、科学技術、政治や宗教、文化とその価値を否定され、帝国の崩壊へとつながっていったわけである。

この「西洋の衝撃」論は今日ではさまざまな批判にさらされている。代表的なものとして、ポール・コーエンは「西洋の衝撃―中国の反応」の図式で描く中国近代史がきわめて偏ったものであり、歴史の実相を伝えていないと指摘した⁽⁴⁾。それ以降、ますます中国近代の「内在的」なアプローチを重視しようとする傾向が強まっている。私が見るところ、近年では「西洋の衝撃」はおろか、「西洋の影響」を探る作業もいささか「時代遅れ」であると思われるようなふしがある。つまりもともと典型的な「外在的」なものとみられているのである。欧米におけるいわゆるミッシュヨナリー(宣教師)研究の退潮もそのためのように思われる⁽⁵⁾。欧米人、とりわけ欧米の若手研究者にとって英文史料をひたすらめくって中国近代史を研究するのはいささか「かつこ悪い」ことのように映っているのではないか。

小野川秀美の『清末政治思想研究』は、清末思想研究の古典的名著であり続けている。「西洋の衝撃」にさらされたとされる時期に、近代中国がいかなる「内在的」な展開を示したのかの解明を「政治思想」の分野からつとに一九五〇年代から試みたものである。この小野川の研究書はもとともいまから半世紀以上前の一九六〇年に東洋史研究会によって発行されたものであり、その後、一九六九年にみすず書房から出版され、二〇一〇年に平凡社(東洋文庫)から増補再版されている。近代中国の研究は新発掘の史料によって日々塗りかえられており、あらゆる研究が発表されと同時に「古く」なってしまうことを宿命づけられている。そのことを考えると異例の生命力を有していると評価できよう。同書で、小野川は「洋務」「变法」「革命」の三段階によって清末の政治思想を見る視角を提示し、日本の学界において大きな影響力をもった。小野川はその冒頭で言う。「清末の政治思想は、洋務論・变法論及び革命論の三段階を主軸として形成されている」⁽⁶⁾。小野川書が人々に強い印象を残すのは、この冒頭に掲げられたこのあまりに

も有名な一節である。ここから小野川書は洋務論↓变法論↓革命論の発展段階史観を固守するものであるという「誤解」を研究者の間で生じてきた面がある。しかし、小野川書を丹念に読み解いてみれば、洋務↓变法↓革命は序の中で言及されているのみであり、全体を貫くモチーフとはいえない。上述の通り、同書は半世紀以上前のものであり、今日の眼からは史料制約も顕著であるものの、同書の本領は実証的な積み重ねにあると言つてもよいと私は考えている。⁽⁷⁾

小野川秀美の議論はたんなる「西洋の衝撃」論や「革命史」観ではない近代思想史の見取り図を提示していること、康有為、章炳麟、譚嗣同、劉師培らの「頂点思想家」を思想的文脈のなかに定位しえていること、「洋務」思想の興起、進化論、無政府主義や戊戌変法の展開過程などの精緻な実証という点では他の追隨を許さないものであるといえる。とはいえ小野川の図式はひとつの「作業仮説」にすぎないわけで近代中国の思想のすべてを説明しつくすことができるわけではない、小野川もそのつもりはない。また「洋務」「变法」「革命」などの言葉は当時の思想家たちが時々に応じて自らの思想を表現する際に適宜、用いたものであり、その当時の思想的なコンテキストと離れて論じることができない。その意味で依然として研究を深める余地はある。

一九八〇年代に溝口雄三は、「近代中国像は歪んでいないか——洋務と民権および中体西用と儒教」、「ある反「洋務」——劉錫鴻の場合」を発表し、この小野川書を名指して批判した。その後、これらの溝口の論文は『方法としての中国』（東京大学出版会、一九八九年）に収録され、同書は中国研究の方法論をめぐって学界にセンセーションを巻き起こした。これに対し、小野川の後継にあたる狭間直樹は平凡社版の「あとがき」の中で、溝口は「本書の価値を徹底的に否定」（三五〇頁）しようとしていると断言した上で、溝口に対して厳しい批判を展開している。狭間によれば、溝口は研究史に対する理解が不足しており、また小野川学説の批判として持ち出した洋務時期の議會論は論理的に成り立たないと指摘した。狭間による溝口批判は、「東京学派」を「代表」する溝口を批判することに「前めり」であるように感じられる。狭間自身も言うように、溝口の議論には「西洋によって切りひらかれた世界史の近

代をどう理解するかという大問題がふくまれている」(狭間三五〇頁) わけであり、溝口の小野川批判は溝口による「方法としての中国」研究の再提起の一部分に過ぎない。その意味で、明清思想史を中心とした巨大な溝口中国学の全体像を把握した上で、批判を行う必要がある。⁽⁸⁾

二、李鴻章評価

またこれらの「洋務」「变法」「革命」などの言葉は今日の歴史家たちが当時を遡及して分析する際に用いる「分析概念」でもあることも忘れてはいけない。たとえば「洋務」はそのもつとも典型的な例である。後世の歴史家たちによって「洋務」は「中体西用」的な、皮相な西洋技術の導入に終始したにすぎず、「变法」や「革命」にのりこえられていくニュアンスでも用いられている。⁽⁹⁾ 岡本隆司は、これまでの私たちの「洋務」理解が梁啓超の著作『李鴻章』のバイアスがきわめて濃厚なものであり、李鴻章の行った「洋務」の実相を把握できていないと指摘し、おもに外交思想の面から李鴻章自身が残した文献に即し、李鴻章の「洋務」に検討を加えている。⁽¹⁰⁾

梁啓超の『李鴻章』はもともと『中国四十年來大事記』の名で光緒二十七年(一九〇一年)に単行本として新民叢報社(横浜、上海)から刊行された(後に『飲冰室專集(四)』(一九三二年)に収録される際に「論李鴻章」と題された。以下、『李鴻章』に統一する)。日本亡命後のものであり、その生涯を通じて「多作」であった梁啓超にとって最初期の歴史著作であり伝記作品である。⁽¹¹⁾ 『李鴻章』は「序例」「第一章 緒論」「第二章 李鴻章之位置」「第三章 李鴻章未達以前及其時中国之形勢」「第四章 兵家之李鴻章(上)」「第五章 兵家之李鴻章(下)」「第六章 洋務時代の李鴻章」「第七章 中日戦争時代の李鴻章」「第八章 外交家之李鴻章(上)」「第九章 外交家之李鴻章(下)」「第十章 投閑時代の李鴻章」「第十一章 李鴻章之末路」「第十二章 結論」の構成をとる。⁽¹²⁾ 李鴻章が亡くなつてわずか二カ月後、彼の死は当時、日本中国両国において少なからぬ反響があつたなか(『中国四十年來大事記』にも徳

富蘇峰「李鴻章」『国民新聞』明治三十四年十一月十日を転載、収録している）、書き上げられたものであり、およそ五万五千字前後の小作である。おおむね年代順にしたがった叙述になっており、軍事、政治、外交にわたる李鴻章の事跡を丁寧に追ったものであり、十九世紀後半以降の史実のひとつひとつについての記述は後世の歴史家が参照するにたるものである。

しかし『李鴻章』が提示した李鴻章像はきわめて特徴的である。「李鴻章は才気があるが学識のない人物で、経験は豊富だが情熱のない人物であった」（『飲冰室專集之三』九〇頁）あるいは「不学無術でしきたりを破ろうとしないのがその短所である。苦勞を避けず誹謗を恐れぬのが、その長所である」（同八九頁）といささか情緒的に否定的なトーンの評価が提示されている。それはなぜか。そのことは、梁啓超がこの『李鴻章』を書いた動機とかかわるようには予想されるが、そのことを記す史料は少ない。そのほば唯一の史料が『李鴻章』の直前に記され、後に『飲冰室自由書』に収められる短いエッセイ「二十世紀之新鬼」（一九〇一年）であり、そこで興味ぶかい李鴻章像が語られている。世紀交替期にあたるこの時期、「十九世紀」「二十世紀」などの語は当時の日本の言論界で頻出であり、梁啓超の文章にもそれは反映されている。

「李鴻章は政府に頼ってその富を地位を保ちたい一心だけであった。もし彼が本当に国を強くし、民に利をはかる志があれば、どうして四十年間も勲臣、耆宿「長老」でありながら、民の望みをつなぎとめ、旧党に打ち勝つことができなかつたのであろうか」（同八九頁）。

「李鴻章は実に学識もなく、情熱もない人物といえる。だが、中国のような大きな国でも学識と情熱で李鴻章より勝っている人はどれほどいるであろうか。十九世紀、列国にはみな英雄がいたが、中国だけには一人の英雄もいなかった。そこで私たちはやむをえず鹿を指して馬と言って自分たちを慰め、李鴻章を世界に高くもちあげていう。

「この人物は我が国の英雄だ」と。ああ、それもかろうじて我が国の英雄とみなすのみであり、また十九世紀以前の英雄となすのみである」（同九〇頁）。「国を強く」したり、「民の望みをつなぎとめ」たりすることのない、学識もな

く、情熱もない人物、「十九世紀以前の英雄」であるともみなしている。ここで「結論」的に提示された李鴻章像を具体的な史実をまじえて描いたのが、『李鴻章』である。そのなかでも「第六章 洋務時代の李鴻章」（副題に「李鴻章が洋務に失敗した理由」）は、「洋務」の語を用いて、李鴻章の中国近代史における位置づけやその功罪をはつきりと書き記したものである。

「洋務」の二字は名詞にはなっていない。しかし、本文の主人公について『李鴻章伝』を著すのに、「洋務」の二字で彼の人生の半ばの二十余年の事業を総括しなくてはならない。李鴻章が同時代の俗儒たちに忌み嫌われたのは洋務のためであり、また同時代の鄙夫たちに重用されたのも洋務のためであった。私が彼を重くみるのも、責めるのも、さらに彼を惜しむのもすべて洋務のためである」（同三三三頁）とする。つまり梁啓超は李鴻章を「洋務」そのものであるとみなし、まさにそれゆえにこそ否定的な評価を李鴻章にかぶせているわけである。

ここでいう「洋務」の内容は、梁啓超によれば、ひとつは「軍事」。つまり船を購入する、機械を購入する、船を造る、機械を造る、砲台を築く、船渠（ドック）を建設する。もうひとつは「商務」であり、鉄道、招商局、織布局、電報局、炭鉱や金鉱を開くなど（同三五頁）。以上の二点にしばられる。これらはいずれも「失敗」に終わったと梁啓超は考える。なぜ「失敗」に終わったのか。その理由には、梁啓超の「洋務」像の根幹にかかわる内容が含まれている。梁啓超自身、「中国の洋務人士のなかで李鴻章ほどの人物はみたことがない」ともちあげつつも、「李鴻章は真に洋務を知っていたといえるのか」（三三三頁）と疑問を投げかける。それは、一言で言えば「李鴻章が洋務のあるのを知りながら、国務のあるの知らなかった」（三三三頁）のである。ここで梁啓超において「洋務」の対義語が「国務」であることが示されている。

また「彼が兵事を知っていたが民政を知らず、外交を知っていたが内政を知らず、朝廷があるのを知っていたが国民があるの知らず、日々他人には大局がわかっていないと批判しながら自分自身は大局を分かっている」（四一頁）こと。「朝廷」と「国民（ネーション）」の対比は「新民説」の論理そのものである（「新民説・論国家思想」）。

また「今日における世界各国の競争は、国家にあるのではなく国民にある」(四一頁) ことも指摘している。たしかに梁啓超が『李鴻章』で提示した「洋務」像は人口に膾炙し、非常に影響力の大きなものであった。当時の梁啓超思想の文脈から「洋務」を再考する必要がある。やはりそこには「新民説」以降、本格的に展開されるナショナル・ヒストリー、つまり「国民国家(ネーション・ステート)」の論理が貫徹しているように見える。⁽¹³⁾

「新民説」と同じ年、一九〇二年に書かれた、梁啓超「敬告我同業諸君」(『新民叢報』第十七号、光緒二十八年十月二日)には興味深い記述がある。「我同業」とは「新民叢報」と「同業」(ジャーナリズム業)の「報館」(新聞社)の関係者という意味である。梁啓超は言う。「二十年前、西学と聞いて驚いた者は多かった。変法を言う者が出るに及んで、西学に驚かず変法に驚くようになった。十年前、変法と聞いて驚く者は多かった。(王安石の変法は世にそしられ、数百年来、変法の二字はきわめてよろしくない名詞であった。私は十年前京師でそのような言い方を聞いたように思うが、今では消えて久しい) 民権を言う者が出るに及んで、変法に驚かず民権に驚くようになった。一、二年前、民権を聞いて驚く者は多かった。革命を言う者が出るに及んで、民権に驚かず、革命に驚くようになった」(『飲冰室文集之十一』三九頁)。そしてこれら「西法」「変法」「民権」「革命」は「国民をみちびく」「向導する」所以である(同三九頁)と梁啓超は言う。岡本隆司が指摘するように、いわば「洋務」↓「変法」↓「革命」の三段階論の「原形」がここに提示されている。ここで注意しなくてはならないのは二点ある。一つは、「西学」↓「変法」↓「民権」↓「革命」の四段階であること。「西学」が「洋務」のことを指すと考えてよい。ただ「変法」と「革命」の間に「民権」が入っていることに注目すべきである。つまり「民権」が一時期、「西学」「変法」「革命」にならぶような論争的な用語であったことがうかがえるのである。事実、梁啓超は一九〇二年を直前にする時期、しきりに「民権」を唱えている。「われわれが民権を主張するようになって十年になるが、当局者はこれを憂い、これを嫉⁵⁴み、これを畏れること、まるで洪水や猛獣のごとくである」(梁啓超「立憲法議」一九〇一年)。「民権」の高唱が梁啓超の「急進化」と歩みを一にしている。⁽¹⁴⁾ 逆に言えば、そのことがこの当時「民権」反対に転じたその師康有為との

「分岐」を生じたともいえる。「民権」はいわば「急進化」する梁啓超を象徴していた。その中で表出する「洋務」。もうひとつは「国民をみちびく」という観点である。「ここである国民をみちびくとはどういうことであるか？

西洋の学者が言うには、「報館とは現代の史記である」。ゆえにこの仕事を治める者は史家の精神がなくてはならない。史家の精神とは何か？ 既往をかんがみ、将来を示し、国民を進化の途へと導くものである。ゆえに史家は主観、客観の二界がなくてはならない。(巻三十四《新史学・史学之界説》)(『飲冰室文集之十一』三九頁)と同じ「敬告我同業諸君」で述べる。「新民説」や「新史学」の論理とも共通するが、この当時の梁啓超にとっては「国民」＝「新民」を創出することが急務であり、「民権」や「革命」はそのスローガンでもあったのである。そのなかでも「洋務」は当時の梁啓超にとって「乗り越えられていく」べきスローガンであったのである。

以上の論述を通じて、戊戌政変(一八九八年)で中国を追われた「变法」派の梁啓超が「变法」の前段階である「洋務」を「批判」する意味で、梁啓超に都合のよいように「洋務」を表象したというのはあまりに単純な理解であることがわかる。そもそもこの時期の梁啓超は「变法」派ではないのである。「新民説」時期の梁啓超の言説を、「中国」の「民族帝国主義」(梁啓超の造語)の「世界」への参入という観点から理解するならば、まさしく梁啓超の「洋務」という概念、そして「洋務」「变法」「革命」なる図式さえもそのプロセスのなかで生み出されたものであるといえる。

三、西洋文明との対峙と進化論

中国文明と西洋文明の比較は古今東西これまで数限りなくなされてきた。そのやり方はさまざままでそれこそ論者の数だけ比較の論点が存在するといってもよい。すぐ思いつくだけでも、例えば、専制と民主、停滞と進取、精神文明と機械文明、道徳と法であったりする。また中国文明と西洋文明はそれぞれきわめて多面的な要素を有しており、ま

たその内容も時代によって変化する。東西文明比較とは言っても、それぞれの文明のごく一部の要素を取り出して、分析を加えることになる。そこには人々を納得させる妥当性も有することもあるが、それ以上に、比較の議論そのものに必然的にもなう限界が存在する。グローバル化の進展に伴い、一方では「西洋化」が全世界を覆っており、また一方では東西文明間の差異が減少して文明の「均質化」が進行している。その意味で東西文明といった二項対立の議論設定そのものがナンセンスであり、厳密な学問的議論が成り立たない。今日では「まともな」研究者が取り上げる研究課題ではないのかもしれない。しかし、その一方で、ハンチントンがいうような「文明の衝突」が現実世界において顕在化している。ヨーロッパで頻発するイスラムによるテロはハンチントンの「予言」があたかも的中したかのように見える。ハンチントンの場合は、その主たる論点は、キリスト教文明（西洋文明）とイスラム文明との対立を予見したものであり、中国文明に対する言及は多くはない。¹⁶とはいえ、中国文明を視野に入れた東西文明の比較論は今日の欧米でも盛んであり、多くの人々の関心をひきつけ、多くの著作が出版され続けている。¹⁷さて、近代中国では一九一〇年代に入り、東西文明をめぐってはなばなし論争がくりひろげられた。¹⁸周知の通り、東西文化論争や科学と玄学論争といわれるものである。第一次世界大戦による「西洋の没落」論もこれらの論争に大きな影を落とした。

さねとうけいしゅうは以下のように言う。「西洋人の渡来は日本よりはやく、西洋文化をとりいれるには日本よりもはるかに有利であった中国が、なぜ近代化におくれたのであろうか？ その原因は、かつてすぐれた文化をもっていったこと、西洋人は中国の文化をしたって中国をおとずれるのである、というかんがえが、いつまでもつづいて、西洋の近代化をみとめようとしなかったことである。「中国」という言葉がしめすように、中国は世界の中心、文化の本源とかんがえられた。中国を「上国」といい、中国の朝廷を「天朝」とよばしめた。日本でも江戸時代までは、そのように呼んでいる例がいくつもある¹⁹」。さねとうの素朴な表現は私たちの腑に落ちる。つまり、中国人は「世界の中心」「文明の本源」を自認しており、中国の文明を考える際に世界秩序を含む中華的な伝統との格闘がカギになる。

この点について、歴史 (history) と価値 (value) をめぐるレベンソンの比喩が示唆的であるので紹介しよう。⁽²⁰⁾ レベンソンがいうには、この時期の中国人の態度に特徴的なことは、「真 (true) である」ことと「自己のもの (mine) である」ことが共に証明されない限り、西洋のものを受け入れなかったということである。「真である」とは、それが普遍的価値基準に照らして優れていることを意味し、「自己のものである」とは、それが中国にもとと備わっている (もしくは備わっていた) ことを意味する。西洋のものについて、単に優れていることが証明されただけでは不十分で、同時に本来中国文明にも備わっていたことが証明されない限り、中国人は究極的に受け入れようとはしなかったのである。レベンソンはそこで「歴史」(history) と「価値」(value) あるいは「真なるもの」(true) と「自己のもの」(mine) という、ものごとに関する二つの評価基準を設定している。「価値」および「真なるもの」とは、あるものごとが普遍妥当性を有するか否かという評価基準であり、「歴史」および「自己のもの」とは、あるものごとが中国に備わっている (備わっていた) か否かという評価基準である。レベンソンは、中国人が西洋のものごとを受け入れるためには、これら二つの評価基準とともに満たすことが必要であったという仮説に基づいて、近代中国における思想の展開を、二つの評価基準の間の「緊張」(tension) と「折衷主義」(syncretism) の推移として描き出している。すなわち、ある衝撃のもとに成立した「折衷主義」の枠組が、新たな衝撃を受けて崩壊し、新たな「折衷主義」が組み立てられるという形で、「折衷主義」の展開という、きわめて特異で限定された視角から、近代中国思想の全体像が描き出されている。中国においては両者の「緊張」関係が熾烈であった。

このような東西文明間の「緊張関係」を一挙に解決したのは進化論の受容であった。進化論は厳復の『天演論』(一八九八年、ハックスリー『進化と倫理』の翻訳) によって先鞭をつけられ、梁啓超によって通俗的な形で普及されたものである。⁽²¹⁾ 一九二〇年代にマルクス主義が普及する以前、中国でもっとも影響力があった西洋思想の一つであるといえる。中国人に普及した進化論は、スペンサーに代表され、⁽²²⁾ 十九世紀末から二十世紀初頭にアメリカで大きな影響力をもった⁽²³⁾ いわゆる社会進化論であった。多くの中国人は社会進化論を普遍法則とみなし、歴史や現実の国際情

勢も社会進化論で説明できると考えた。社会進化論は、社会有機体の変化や発展には、あたかも生物有機体におけるのと同様に進化の法則がたらぬかと考へられていると考へる。進化の法則は洋の東西を問わず、一様にあらわれる。それゆえ、社会有機体の進化のパターンも、本質的には、洋の東西を問わず一様なものとしてあらわれる。こうした社会進化論の枠組みを通じて中国文明と西洋文明の比較を行う場合、同一の進化の軌道上の遅速の差異に還元され、いわば「先進」と「後進」の違ひとして説明されることになる。もちろん、進化の階梯を「先に」進んだほうが、より「優れている」とされるわけである。そしてたとえば民族性、地理、気候、農耕、政治経済の差異のような東西文明に関するさまざまな要因は、ある文明が進み、ある文明が遅れた原因を説明し補強する後付け的な役割を担うにすぎない。つまり社会進化論の立場からすると西洋文明のほうが中国文明より説明の余地なく「優っている」ということになる。⁽²⁴⁾ 「全面的西洋化」は一九二〇年代に胡適が唱えたとされるが、事実上の「全面的西洋化」は社会進化論の観点による西洋文明理解に始まると言ってもよい。

なお明治日本においても鹿鳴館に代表される盲目的な西洋文明崇拜があった。渡辺浩によれば、明治日本の西洋文明崇拜は（中国とは異なり）進化論導入とは無関係である。⁽²⁵⁾ 進化論導入以前、福澤諭吉による『西洋事情』、『文明論之概略』執筆当初から西洋文明崇拜の立場であったという。日本ではむしろ進化論受容以前に、あの浮かれたような「文明開化」の社会的流行現象が発生した。

四、西学としての東学

東アジアにおける西洋文明受容を考える際には「東学」は避けては通れない。「東学」とは日本経由の日本経由の西学知識を指す。中国知識人は西洋の学術、思想や制度などをいち早く西洋文明を取り入れた日本における日本語の書籍を通じて学ぼうとしたのである。まさに「東学」は西洋文明の入り口であった。明治維新以降、明治政府は法

律、政治、経済、工業などありとあらゆる分野で近代化をはかつてきた。教育界でいえば、明治十九年（一八八六年）、東京大学（開成学校の後身）から帝国大学への改組が行われ、高等教育システムが急速に整備されることになる。その後、明治二〇年代、三〇年代が、日本における近代的な学問体制の形成時期となる。ちょうど一八九〇年代後半は中国人留学生、知識人の日本滞在が「ブーム」を迎えはじめた時期である。日清戦争の敗北によって「東学」が学ぶに足るものであるという認識が広まり、「東学」への関心が高まった。清廷の政変もそれを後押しした。

さねとうけいしゅうの研究によると一八九八年三月、清国の留学生十三名が日本にやってきた。これが清国の留学生のはじまりであった。彼らは総理衙門で選抜試験をうけ派遣された国費留学生である。駐日清国公使裕庚は外務大臣（文部大臣兼務）西園寺公望に相談し、高等師範学校校長の嘉納治五郎にこれらの留学生の世話を依頼したという。その後、留学生は次第に増加し、一八九九年には二百名、一九〇二年には四、五百名といわれ、一九〇三年には一千名、一九〇六年にはピークの八千名になった。⁽²⁷⁾ 一説には一万または二万とも言われるが、李喜所は『学部官報』（光緒三十二年）の記載から一万二、三千人と推計する。⁽²⁸⁾ 周知の通り、日露戦争後の一九〇五年八月に東京で中国同盟会が成立し、革命の風潮が高まった。日本政府は清朝政府の要請を受けて、一九〇五年十一月に、革命化した留学生を取り締まる「清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関する規程」を制定した。これに対して、秋瑾（実践女学校）、陳天華（弘文学院）らが留学生の一斉帰国を主張して抗議した。留学生数は一九〇六年をピークにして減少の一途を辿り、一九一〇年末には四千名近くにまで減少したとされる。⁽²⁹⁾ 東京には革命団体のほか、亡命政客、留学生を中心にした様々なサークルが存在したことは間違いない。これらが東学の中国への流入を促した。

日本亡命前の康有為も「東学」に関心を持っていたことが知られる。康有為は一八九七年に『日本書目志』を出版し、「東学」に関連する書籍群を紹介している。従来この『日本書目志』は康有為の読書量の幅広さを示すものとしてきたが、近年王宝平により日本語種本（『東京書籍出版営業社組合員書籍総目録』明治二十六年）が発見されている。「東学」に関連する書籍を康有為が中国において実際に手に取った可能性は否定されている。しかし、康有為

自身の「東学」への関心は確かに存在し、何らかのアクセスを試みたことは間違いないであろう。『日本書目志』の中で康有為は「東学」の語を使つてはおらず、「東学」の語の初出についてはまだはつきりしていない。おそらく、徐維則・顧燮生補『東西学書録』（一八九九年初版、一九〇二年増補）を待たないといけないだろう。⁽³⁰⁾

さてこの「東学」についての研究は、古くはすでに丸山昇の『魯迅』研究（丸山昇『魯迅』——その文学と革命』一九六五年など）にその手法が用いられているが、私が見る所、一九八〇年代に近藤邦康の招きにより東大で長期にわたり研究活動を行った湯志鈞の研究が先駆けであろう。⁽³¹⁾その後、長期の日本留学経験を持ち、日本語史料の読解が可能な鄭匡民による梁啓超の「東学背景」についての研究が発表された。⁽³²⁾今日では日中の研究者によるこの種の研究が増加し、まさに汗牛充棟の感がある。その成果は確かなものがある。しかし桑兵が言うように、近代中国の知識と制度を理解する際の複雑さは「東学背景」を理解することの難しさにある。古来日本は中国文明の濃厚な影響下にあり「東学」といっても定義が難しい。⁽³³⁾清末新政での「日本モデル」の役割を過大評価したダグラス・レイノルズの『新政革命』はおそらく歴史の一面を拡大解釈したに過ぎないであろう。⁽³⁴⁾また一部に中国知識人の「東学背景」を研究するに当たって、単なる日本語種本の詮索のみに終始し、思想のダイナミズムを捉えられないとの指摘もある。歴史研究の真の目的は「歴史の現場」を生き生きと再現することにある。種本詮索のみでは「歴史の現場」が見えてこないというのである。

五、概念史という視座

二〇〇〇年代に入り、日本、中国、韓国および欧米において概念史を自称する研究潮流が現れた。私もその研究潮流や研究グループと少なからず関係があり、またそれらの研究グループに論文を発表したりしている。そのため「川尻は概念史を研究している」との誤解があるようなので、ここでは概念史に対する私の考えを述べておく。

概念史といえ、おおかたの研究者はアーサー・O・ラヴジョイの名を思い起こすであろう。⁽³⁵⁾ラヴジョイが一九二〇年代に提唱し、雑誌 *The Journal of History of Ideas*, 1940- (以下には、一九七四年にスクリブナー社より刊行された *The History of Ideas Dictionary* に引き継がれる) を生み出した観念史 (諸観念の歴史) の方法である。ラヴジョイの意図は歴史の中で諸観念の伏流水を掘り起すことであって、観念は基本的には変化せずに歴史の中を流れてきたものと考え、そのためそれを地上に出さなかつた地層の構造にも十分に払っているとは言いがたいといううらみがある。ラヴジョイの主な考えは、ハーバード大学のウイリアム・ジェイムズ記念講義 (一九三二〜三三年) の「存在の大きな連鎖——ある観念の歴史の研究」で示されているが、彼は観念史とは哲学や宗教が生み出した観念が文学の中に薄められて存在するのを掘り起すことだと言っている。⁽³⁶⁾別言すれば、大学の中で専門化・分業化によって絶縁状態にある哲学と文学研究の橋わたしをすることなのである。橋わたしといってもラヴジョイの場合、単一観念の普及継承が問題なので、追跡はつねに哲学の側からの一方通行として行われる。このあたりがラヴジョイの観念史の「弱点」ともいべきもので、学問的な方法論として厳しい批判がさらされてきた。つまりある「観念」を様々なテキストの中に発見し、「観念」の普及継承に焦点をしばり、「つなぐ」作業に終始しているというものである。このことが思想研究において最も肝要なコンテキスト (context) への洞察不足につながってくる。⁽³⁷⁾その結果、観念史の問題点として、変化の観点、すなわち横の多様性、縦の歴史性の欠如が指摘されることになる。

このようなラヴジョイの観念史の問題点が意識されていたため、東アジアにおける概念史研究の「盛行」はラヴジョイの観念史とは関係はない。⁽³⁸⁾二〇〇六年に国際日本文化研究センターで劉建輝と孫江によって「東アジアにおける近代知の空間の形成——近代日中學術概念の比較研究」という研究班が開かれ、私もそのメンバーに加わった。その後、ここに集ったメンバーが離合集散し、国内・外に波及し、多くの編著、論文が世に出たが、「概念」の「比較研究」について統一した見解はなく、問題意識もまちまちであった。中心メンバーの鈴木貞美 (日本文学) は「近代」を根本から問い返すにはどうすればよいか。そのひとつの方策として、わたしは東アジア近現代における知的シ

システムとそれを支える価値観とを問う研究を提案してきた。東アジアでは、ヨーロッパ近代のそれを受容しつつ、それぞれの地域、国家にそれぞれ独自の知的システムと価値観をつくりだしてきた。それらをヨーロッパやアメリカと比較し、その過程に働いた歴史的諸条件を考察することによって、「近代」という時代の総体を歴史的に、そして地理的に相対化しようと考えるからだ。知的システムは、文化の諸制度を支える学芸諸ジャンル、それぞれの概念の相互関係、すなわち概念構成 (conceptual system) に端的に示される。概念編制といってもよい。システムはネットワーク (network) と考えてもよい」と述べ、明治日本をはじめ東アジアの諸学芸のジャンル、それぞれの概念の相互関係や編成への学問的関心を強調した。

中国学者の孫江は秘密結社の研究など中国社会史の研究者であったが、日本留学を経て、ポストモダン歴史学への関心から「新史学」の構築を目論む一環として概念史研究を手がける⁴⁰。現代思想の修辭に富んだ孫江の論文は難解であり、孫江の真意を理解するのは容易ではない。結論的に言えば、諸論集に集められた論文を見ても論者によって方法論は様々であり、統一が取れていない。概念史とは言ってもその問題意識、研究方法は様々である。論者の学問的方法論は、国語学・語彙史、日本文学、比較文学、中国思想、中国近代史、中国文学など様々である。各人がそれぞれの方法でやっているに過ぎない⁴¹。そのため概念史の定義や方法論についての議論を中国思想の現場を離れて「空中戦」的に行っても生産的にならないと感じる。私の見るところ、東アジア概念史の方法上の特色は、漢字語を共有していることである。日本漢語は西洋由来の近代性 (modernity) を載せて、東アジアの思想空間を横断した。西洋の諸価値を翻訳した日本漢語は概念史への接近が容易であることが指摘できよう。

六、日本漢語

清末から民国初の時期に、西洋の学術、制度、文化等にかかわる意味内容を言い表す日本製漢語が大量に中国に流

入し、中国語の語彙に大きな変化をもたらしたことはよく知られている。例えば、哲学、文学、歴史、社会、憲法、経済等々である。西洋に由来するありとあらゆる「近代」的な概念はすべて日本製漢語で表現されるようになり、中国に紹介されたといっても過言ではない。このような「日本漢語」を網羅的に扱ったものとしては、実藤恵秀（『中国人日本留学史』くろしお出版、一九六〇年の第七章「日本語彙の中国語文へのとけこみ」等）、鈴木修次（『日本語と中国——漢字文化圏の近代化』中央公論社、一九八一年）らの古典的研究があり、今日でも参照するに足る力作である。近年の日本でも沈国威（『近代日中語彙交流史』笠間書房、一九九三年）、荒川清秀（『近代日中學術用語の形成と伝播——地理学用語を中心に』白帝社、一九九七年）らの着実な研究もある。中国本土でも王立達の論文「現代漢語中従国語借来的詞彙」（『中国語文』一九五八年）をさがげに本格的に研究がスタートし、同論文では五五八の日本漢語の借用を紹介した。高名凱・劉正淡『現代漢語外来詞研究』（文字改革出版社、一九五八年）の外来語研究の立場からの先駆的な研究も出、現代中国語の語彙の主要部分をなす一二六六以上の新造語を確認し、そのうちの四五九が日本漢語であると指摘した。実藤の研究もじつはこれらの研究を踏まえたものである。

ところが近年、イタリア人研究者マシーニFederico Masini、*The Formation of Modern Chinese Lexicon Evolution to ward a Nation Language: the Period from 1840 to 1898*, Journal of Chinese Linguistics Monograph Series No. 6, 1993, Berkeley, U.S.A.（中国語訳、馬西尼『現代漢語詞彙の形成：十九世紀漢語外来語研究』漢語大詞典出版社（上海）、一九九七年）によって従来日本製漢語であったと考えられてきたものの四分の一近くが、実は十九世紀初頭に西洋人宣教師によって中国人アシスタントの協力のもと非宗教的なテキストの翻訳の過程で漢訳された造語であり、それらを日本人が「日本漢語」を造語する際に参考にしたという説が出された。これはまだ仮説の域を出ないし、実証面でもいくつかの疑問点が学者から出されている⁽³⁵⁾。しかし、英文資料の博搜に基づく彼の議論には説得力があり、この方面での研究にあらたに一石を投じた意義は大きく、多くの反響をよんだ。

これらの議論を踏まえた上で、「言語横断的な実践」という独自の観点から中国における新語彙の問題をとりあげ

たのが、リディア・リウである。彼女は反響をよんだその著『言語横断的实践』Jidia, H. Liu, *The Translingual Practice: Literature, National Culture, and Translated Modernity—China, 1900–1937*, Stanford University Press, 1995. のなかで近代中国の外来の新名詞とそのもとなつた外国の原語との間は意味内容がそのまま自然と移行するのではなく、二種あるいは多種の言語・文明間の思想観念が互いに作用しあうある種の「実践」が介在するという。外来の新名詞の思想的な意義は、その語彙が二種あるいは多種の言語・文明間で「互訳」されるまさにその過程に始まるのであると考え、その意味で新名詞は比較思想史の研究対象になりえるのである。それゆえ我々は言葉、概念、カテゴリー、言説の間の関係のダイナミックな歴史のただなかに分け入っていかなくてはならないとする。

七、東アジアの思想空間

東アジアという言葉聞いてイメージするものは、人さまざまである。アジアは古代ギリシア、ローマがその東方を指すときに用いた方向概念であった。つまり今日という中近東から東を漠然と指すものに過ぎなかった。しかし中近東の東には歴史的にイスラム、インド、中国等の文明圏が存在し、独自の世界を形成しており、アジアを一つの実体ある概念とするのは、「アジア」の側からみても、そもそも無理がある。

また東アジアはこれまでに日本人によってさまざまに論じられてきた。東アジアはEast Asiaの訳語で用いられるが、同じくEast Asiaの訳語として用いられる日本語に東亜がある。東亜は東亜細亜をつづめたものであるが、東亜の語は日本人には独特のニュアンスが残っており、中立的な「アジア」の「東側」の意味というよりは、第二次世界大戦中に盛んに唱えられた大東亜共栄圏や大東亜会議などをただちに想起させるものである。なお「アジア」に類似する単語である「亜細亜」「東洋」の三者の間にはとりかえ不可能な大きなニュアンスの差があると加藤祐三の研

究が示している⁽⁴⁵⁾。加藤の研究によれば、「亜細亜」はマテオ・リッチの「坤輿万国全図」に始まり、魏源の『海国図志』が幕末に盛んに読まれたことで、「亜細亜」は欧米の侵略に対する危機意識を示した。明治後半以降、日本の世論は「亜細亜」は「興亜」と「脱亜」の二つに分岐する。「アジア」というカタカナ表記は昭和初年以降からみられ、戦後一般化する。「東洋」は「西洋」に対応する語として明治以降登場し、日清戦争前あたりからすこしずつ定着してくるが、一八九四年に那珂通世の提案で「東洋史」が中等教育に採用されることによっていっそう促進されたとする。一方、「東亜」の語は、もともとは文明史的な関心から二十世紀の早い時期の日本で成立した。子安宣邦は浜田耕作（青陵）『東亜文明の黎明』（一九三九年。一九二九年に京都帝国大学で行われた講演をもとにして）に言及する。浜田は「東亜文明」概念を提示し、その「東亜文明」が指し示す地域は、文明の起源である中国と、その中国と同一の文明圏を構成する朝鮮と日本を包括するものと明確に規定している。子安によれば、その後、「東亜」はしだいに帝国日本のイデオロギーと結びついていった⁽⁴⁶⁾という。

東アジアという概念は中国語のなかには基本的にはないようである。溝口雄三もそのことを自らの経験を踏まえ指摘している。「私が「日中知の共同体」（日中などの知識人の対話プロジェクト）で最初に苦労したのが、彼らには東アジアを媒介にして自国を認識するという意味での東アジア認識がさっぱりないということです。つまり中国人の自国認識には〈東アジア〉が存在しないという衝撃でした⁽⁴⁷⁾と述べる。また孫歌が指摘するように中国人の間では「アジア」という概念も希薄であった。「東亜」という中国語の単語はないわけではないが、熟した概念であるとは言えないようである。英語の East Asia の直訳の意味合いが強い。しかし、羽田正によれば、英語で East Asia といった時に英米人が思い浮かべるのは、東南アジアも含めてアジアの東方というほどの意味のようである。日本人が東アジアといつてイメージする地域は East Asia というよりは、英語で普通 North East Asia といわれる地域と重なるのではないかとの指摘がある⁽⁴⁸⁾。なるほど中国語での「東亜」は、英語の East Asia のニュアンスを踏襲し、華人の多いシンガポール、マレーシア、ベトナム等も含まれるように見える。日本人のイメージする東アジアとはいくらかズレ

があるようである。いずれにせよ、これらの例は、地域名称と人々がイメージする実態との微妙で複雑な関係を示しているわけである。それと同時に、東アジアとはきわめて日本的な概念であるとひとまずは確認できよう。⁽⁴⁹⁾

「東アジア」は、江戸末期以来一貫して日本人の関心の対象であった。幕末の「開国」を迫られた時期に東アジアへの関心が芽生えたとされるのが通例である。⁽⁵⁰⁾そこで日本において東アジア論がはじめて発生した。その後、日清戦争を前にして「西洋」に対するアジアの一員としての日本人の自覚の高まりから、日本において「東洋史」(那珂通世の発案)が成立したと理解される。⁽⁵¹⁾日本では今日に至るまで、その時々々の現実的な情勢に影響されながら、継続して東アジアへの関心が続いた。一九九〇年代に入り、新しいアジア研究の方法論が模索される中で浜下武志は「朝貢貿易システム」論を提唱し、「東アジア」の地域イメージを提示した。⁽⁵²⁾浜下によれば同地域のネットワークは、中国の圧倒的な経済力を背景にした朝貢貿易によって作り出され、モノの動きとヒトの往来と重なり合いながら、権勢(power politics)と地勢(geopolitics)とが角逐する場が作りだされた。当該地域のダイナミズムを作り出したのが、「華夷変態」である。東アジアにおいては地域と国家の関係は「華」と「夷」の関係としてあらわれたという。十九世紀後半から日本が作り出そうとした「アジア」とは、中国が歴史的に維持してきた広域秩序(＝華)を換骨奪胎し、その役割を日本へと変換しようとする動きであったという。⁽⁵³⁾この浜下の議論に対して、日本国内でもさまざまな批判があり、例えば、岡本隆司は「すこぶる魅力的」としながらも「具体的な史実」が示されておらず「方向提示」的なものに過ぎないとみなす。⁽⁵⁴⁾本野英一の批判はより激烈であり、「華人あるいはアジア人のネットワークの空間的広がりばかりを強調しても意味がない」と糾弾する。⁽⁵⁵⁾汪暉による詳細な浜下理論の批判もある。⁽⁵⁶⁾また孫歌によれば「アジアから考える」ことを企図した浜下の議論ですら「日本」的な発想をまぬかれておらず、おおかたの中国人の理解を得ることは難しい。⁽⁵⁷⁾

その後、「東アジア」を考える上で無視することのできない著作が出た。山室信一『思想課題としてのアジア』(岩波書店、二〇〇一年)である。山室はまさに「博搜」ともいえるべき、大量の実証を積み重ね、「東アジア」という場

における「知の連鎖」が近代日本における「アジア」認識の重要な契機になったことを指摘する。従来、明治日本の西洋に関する学問が清末中国への伝播を扱った研究はいくつか存在する。梁啓超の「東学」がそのひとつである。しかし、それはあくまでも日本から中国への「一方通行」な思想の伝播をたどったものに過ぎない。山室の研究はそうではなく、「知の連鎖」によって「東アジア」という場が形成されてきたことを思想的に実証するものである。山室の著書は、あまりにも大部で、膨大で精緻な史料提示に幻惑されて、著者の意図が正確に理解されているとは言いがたいように思われる。澤井啓一は「東アジア」を脱中心的（日本でもなく中国でもなく）に叙述できていることを評価しつつも、「日本とそれぞれの地域との『交流』が現実には深まるにつれ、日本の役割が低下したことをどう評価するかという問題が十分に説明されているとは言いがたい」と指摘する⁵⁸。緒形康は山室の引用文献が圧倒的に日本語のものに偏っており、日本的「アジア主義」に陥る一步手前のある種の「イデオロギー性」を有していることを指摘している⁵⁹。あくまでも「日本思想史」の側からみた「アジア」であることをまぬかれていない。中国研究の立場から見た場合、山室著の最大の欠陥がそこにあるといってもよいだろう。

もしかりに中国の側から書いた『思想課題としてのアジア』であればどのような叙述が可能になるのか興味をひかれるところである。そのことを通じて真に「東アジア」から「東アジア」の「知の連鎖」を語ることになるのかも知れない。山室は、「本書を『思想課題としてのアジア』と題したのは、アジアという空間が思想の課題として立ちただかっているということとともに、なによりもそうした問いを、可能な限り根源的な地点まで問い続けることが思想的課題であるという意味を込めたものである」（VIII頁）と述べる。「アジアという空間」を思想課題として提起し、それを思想史研究の立場から根源的に問い直す必要性を強調したことに意義がある。

小結 清末の思想空間とは

二二一

戈公振の古典的研究『中国報学史』（三聯書店、一九五五年）をまつまでもなく、清末にはジャーナリズムの発達をみた。宣教師たちは条約港を中心に新聞を刊行し、その後、在野の知識人による新聞が発行された。戊戌変法史で言及される『強学報』や『時務報』など維新派の活動はその流れの延長上にあるといってもよい。潘光哲は「知識倉庫」をいう語を用いて、アヘン戦争以降、中国知識人の間で「世界」に関する「知識」の流通と共有のさまを描く。⁽⁶⁰⁾ 敵復『天演論』の版本の流通を追った王天根の研究によれば、一八九〇年代には印刷、出版、流通の一定程度の発展が見られたことが分かる。⁽⁶¹⁾ 『時務報』には「東文報訳」という記事欄があり、古城貞吉（後に東洋大学漢文学教授）が日本国内で刊行された新聞雑誌記事を中国語訳して定期的に中国の読者に伝えていた。⁽⁶²⁾ このことは中国でのジャーナリズムの発達によって日中間にある種の「思想空間」が成立したことを物語っている。中国におけるジャーナリズムの成立を『時務報』に想定する研究者もいるようである。

中国教育史を研究する阿部洋によれば、日清戦争後から新政時期までは「日本モデル」であったが、民国時期の一九二〇年代以降になると「アメリカモデル」へと移行したとされる。中国の教育近代化に当たって近代化モデルの参照が日本からアメリカに移ったというのである。⁽⁶³⁾ 王汎森は清末思想における「日本要素」を分析した後、一九二〇年代に入るとアメリカ留学組の存在感が増したことを指摘する。⁽⁶⁴⁾ 王は陶希聖の語として、日本留学組を銀メッキ（鍍銀派）、英米留学組を金メッキ（鍍金派）と喩えるエピソードを紹介した。⁽⁶⁵⁾ つまり「日本要素」の衰退である。近代中国の知識や制度の傾向を「日本モデル」や「アメリカモデル」と称するのはなるほど分かりやすい比喩である。しかしそれだけでは「思想空間」を理解するにはきわめて不十分ではないか、というのが私の問題意識である。

汪暉は『思想空間としての現代中国』（岩波書店、二〇〇六年）の日本語版序のなかで次のように述べる。「いま世界で使われている中国についてのさまざまな解釈枠は、中国を各種理論や方法で説明されるべき、受動的な客体とし

てのみ扱っている。とするならば、中国は真の意味で「思想空間」となりえるだろうか？⁽⁶⁶⁾。要するに中国は外来の「各種理論や方法で説明」されるべきではなく、また「受動的な客体」とされるべきではない、というのである。あえて深読みすれば、汪暉は、中国は一つの「思想空間」であり、「思想空間」として理解され分析されるべきだ、と考えている。既述の通り、一九八〇年代後半、ポール・コーエン、溝口雄三らが提起した中国に対する「内在的な理解」は如何にして可能になるであろうか。

そもそも葛兆光が「中国史の中で『中国』とは『変化する中国』であり、それぞれの王朝が離合するのが常である」という事情から、歴代王朝の中央政府が統治する空間が境界であり、それは常に変化してきた。ましてやこの「中国」の中の王朝、エスニックグループ、境界は常に歴史の中で変遷、交錯、融合してきた⁽⁶⁷⁾というように、中国そのものが歴史的に現在に至るまでゆるやかな「一体性」「一貫性」を保持しながら変化してきたのである。

その中で私は山室や汪暉らの問題意識を共有し、「清末の思想空間」という課題設定をした。「清末の思想空間」の全域を調査し、その全貌を語りつくすことはもとより一個人の手によつてでは不可能である。私の野心としては、これまで語りつくされた分析の枠組み——たとえば、西洋の衝撃、洋務・変法・革命、西洋文明と東洋文明、西学・中学・東学、中国・日本など——をとりあえず全部先入見を除外してみ、そこに出現する言説や史料（中国語に限定されない。英語、日本語でも）の束が混沌状態で立ち現れるさまを摘出してみることにあつた。またナショナリズムなどといった歴史を貫く縦系に寄りかかるとの叙述を⁽⁶⁸⁾目指した。その際、中国哲学、中国近代史、日本思想、政治学、文学、西洋史、教育史、ジャーナリズム史などといった既存の学問分野の垣根をいささかなりとも超え出たものを意図している。清末思想は「思想空間」として捉えた時にだけ理解が可能になるからである。

注

(一) 佐藤慎一「アメリカにおける中国近代史研究の動向」（小島晋治・並木頼寿編『近代中国研究案内』岩波書店、一九九三

- 年) 八六頁。
- (2) 日本語による梁啓超の伝記的研究としては、狭間直樹『梁啓超——東アジア文明史の転換』(岩波書店、二〇一六年)、陳立新『梁啓超とジャーナリズム』(芙蓉書房出版、二〇〇九年)、李海『日本亡命期の梁啓超』(桜美林大学北東アジア総合研究所、二〇一四年)等。
- (3) 並木頼寿「中国の近代史と歴史意識——洋務運動・曾國藩の評価をめぐって」(小島晋治編『岩波講座現代中国第四巻 歴史と近代化』岩波書店、一九八九年) 四〇頁。
- (4) Paul A. Cohen, *Discovering History in China: American Historical Writing on the Recent Chinese Past*, New York: Columbia University Press, 1984. 日本語訳は、ポール・コーエン『知の帝国主義——オリエンタリズムと中国像』(佐藤慎一訳、平凡社、一九八七年)。
- (5) 「開港場」での洋書や漢訳洋書が中国や日本の「近代」に与えた影響への新しいアプローチ、再評価については、劉建輝「近代」は上海からやってくる——幕末維新时期における「情報」ネットワークの形成と展開」(『武蔵大学総合研究所紀要』二〇〇〇年、第十号)。
- (6) 小野川秀美『清末政治思想研究』(みすず書房、一九六九年)。
- (7) このことは、ほぼ同時期に発表され、同じ時期を研究対象にしていた野村浩一『近代中国の政治と思想』(岩波書店、一九六四年)と対比してみるとよりはっきりする。野村著が丸山眞男の日本思想史研究の強い影響下に書かれ、康有為の公羊学に荻生徂徠の「自然と作為」に匹敵するような「近代性」が付与されている。
- (8) 溝口中国学の全体像については、伊藤貴之「解説——伝統中国の復権、そして中国的近代を尋ねて」(『中国思想のエッセンスII』岩波書店、二〇一一年)。子安宣邦「現代中国の歴史的な弁証論——溝口雄三『方法としての中国』『中国の衝撃』を読む」(同『日本人は中国をどう語ってきたか』青土社、二〇一二年)は、溝口の「方法としての中国」に対して批判的な立場である。
- (9) 范文瀾『中国近代史(上册)』(一九五五年)等。
- (10) 岡本隆司「洋務・外交・李鴻章」(『現代中国研究』中国現代史研究会、第二十号、二〇〇七年)。
- (11) 本稿での梁啓超の文献の引用について一言付け加えておく。以下、梁啓超の文章の引用は『飲冰室合集』(中華書局、一九

- 三二年。一九八九九年再版)に拠ることにする。梁啓超の文章を集めた文集の類は、梁啓超の存命中から無数に発行されているが、『飲冰室専集』と『飲冰室文集』と並録した『飲冰室合集』は、現存の各版本の中で梁啓超の文献を最も網羅的に収録したものであるからである(李国俊『梁啓超著述系年』復旦大学出版社、一九八六年、一四頁)。しかし『飲冰室合集』とて十全なものではない。李国俊が言うように、『飲冰室合集』に収録された文献だけでも九百万字あまりであるが、『飲冰室合集』に未収録のものは、その他の文集、刊行物に掲載されたものや未公刊の書信の類、およそ百万字近くが見込まれるという(同五頁)。湯志鈞によれば、一九〇二年八月から一九一一年四月十日、『新民叢報』、『政論』、『国聞報』に載った梁啓超の文章を調査しただけでも相当な数の政論や学術論説が漏れている(湯志鈞『人物結集与近代報刊』同『梁啓超其人其書』中国人民大学出版社、二〇一一年、一四頁)。なお近年、『飲冰室合集』に未収録で梁啓超の文章(と推定されるもの)を集めたものに、夏曉虹編『飲冰室合集』集外文(上・中・下冊、中華書局、二〇〇五年)が刊行され、その欠の一部が補われた。
- (12) 梁啓超の『李鴻章』には日本語訳が存在する。梁啓超著(張美慧訳)『李鴻章——清末政治家悲劇の生涯』(久保書店、一九八七年)。訳文はそのまま引用せず、適宜修正した。
- (13) 狭間直樹「新民説略論」(同編『共同研究 梁啓超』みず書房、一九九九年)。
- (14) 『梁啓超年譜長編』上海人民出版社、三〇一〜三〇二頁。光緒二十八年十一月、黄公度「遵憲」「新民師函丈書あて書簡」。黄遵憲は梁啓超の「新民説」にみられる「急進化」に危惧を表明している。
- (15) Tang Xiaobing, *Global Space and the National Discourse of Modernity: the Historical Thinking of Liang Qichao*, Stanford University Press, 1996.
- (16) サミュエル・ハンチントン(鈴木木税訳)『文明の衝突』集英社、一九九八年、三二九頁。原書はSamuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, New York: Simon & Schuster, 1996.
- (17) 近作^{ベグ} Ferguson, Niall, *Civilization: the West and the Rest*, London: A. Lane, 2011. 邦訳は「ニール・ファーガン」著(仙名紀訳)『文明——西洋が覇権をとれた6つの真因』(勁草書房、二〇一二年)。「Ian Morris, *Why the West Rules— for Now: the Patterns of History, and What They Reveal about the Future*, New York: Farrar, Straus and Giroux, 2010. 邦訳は、イアン・モリス著(北川知子訳)『人類五万年文明の興亡——なぜ西洋が世界を支配しているのか』(筑摩書房、二〇一四年)。

- (18) 陳松編『五四前後東西文化問題論文選』(中国社会科学出版社、一九八五年)。
- (19) さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』(くろしお出版、一九六〇年)二四～二五頁。
- (20) Joseph R. Levenson, *Confucian China and its modern fate: the problem of intellectual continuity*. London: Routledge and Kegan Paul, 1958. 佐藤慎一の紹介を参照した。佐藤慎一『近代中国の知識人と文明』(東京大学出版会、一九九六年)七二頁、二〇八頁。
- (21) 中国における進化論については、坂元ひろ子『中国民族主義の神話——人種・身体・ジェンダー』(岩波書店、二〇〇四年)。
- (22) ただし、スペンサー自身はダーウィン理論をそのまま社会現象に適用した社会ダーウィン主義 (social Darwinism) を唱えたわけではない。スペンサーは、物理的、有機的、社会的一切の現象を統合し説明する単一原理として進化論を提示しようとしたとされる。山下重一『スペンサーと日本近代』(御茶の水書房、一九八三年)四七頁。
- (23) R・ホフスタッター(後藤昭次訳)『アメリカの社会進化思想』(研究社、一九七三年)五頁。Richard Hofstadter, *Social Darwinism in American thought, 1860-1915*, Philadelphia, Penn.: Univ. of Pennsylvania Press, 1944.
- (24) 佐藤慎一「進化と文明——近代中国における東西文明比較の問題について」(『東洋文化』第七十五号、東京大学東洋文化研究所、一九九五年)一一九頁。
- (25) 渡辺浩『東アジアの王権と思想』(東京大学出版会、一九九七年)二二〇～二二二頁。
- (26) 中山茂『帝国大学の誕生』(中公新書、一九七八年)。
- (27) さねとうけいしゅう『中国人日本留学史』(くろしお出版、一九六〇年)一五頁。
- (28) 李喜所「清末留日学生小考」(同『中国留学史論稿』中華書局、二〇〇七年)二五一頁。
- (29) 小島淑男『留日学生の辛亥革命』(青木書店、一九八九年)一七頁。
- (30) 村田雄二郎「康有為と『東学』——『日本書目志』をめぐる」(孔祥吉・村田雄二郎『清末中国と日本——宮廷・変法・革命』研文出版、二〇一一年)二七三頁。
- (31) 湯志鈞(兒野道子訳)『近代中国の革命思想と日本』(日本経済評論社、一九八六年)、湯志鈞・近藤邦康『中国近代の思想家』(岩波書店、一九八五年)。
- (32) 鄭匡民『梁啓超啓蒙思想的東学背景』(上海書店出版社、二〇〇三年)。

- (33) 桑兵「辛亥時期的變政与日本」(同『交流与对抗——近代日中關係史論』広西師範大学出版社、二〇一五年) 一二〇頁。
- (34) Douglas R. Reynolds, *China, 1898-1912: the Xinheng Revolution and Japan*, Cambridge, Mass.: Council on East Asian Studies, Harvard University, 1993.
- (35) ラウジョイの觀念史研究の評価については、水田洋『思想の國際転位——比較思想史的研究』(名古屋大学出版会、二〇〇〇年)「序章 旅をする思想」から示唆を得ている。
- (36) アーサー・O・ラウジョイ(内藤健二訳)『存在の大きい連鎖』晶文社、一九七五年、二四頁。Arthur O. Lovejoy, *The Great Chain of Being: A Study of the History of an Idea: the William James lectures delivered at Harvard University, 1933*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1936.
- (37) 言うまでもないことだが、これとは逆に思想のコンテクストを重視するのが、ケンブリッジのクエンティン・スキナーの政治思想史方法論であった。クエンティン・スキナー(半澤孝麿・加藤節編訳)『思想史とはなにか——意味とコンテクスト』岩波書店、一九九〇年)。James Tully ed, *Meaning and Context: Quentin Skinner and his Critics*, Cambridge: Polity, 1988.
- (38) ドイツ概念史の研究で知られるコザレック著作の英訳刊行が、英語圏での概念史研究のひとつの契機になったようである。Reinhart Koselleck; translated by Todd Samuel Presner; foreword by Hayden White, *The Practice of Conceptual History: Timing History, Spacing Concepts*, Stanford, Calif.: Stanford University Press, 2002.
- (39) 鈴木貞美「東アジア近代の知的システムを問う直す」(孫江・劉建輝編『東アジアにおける近代知の空間の形成』東方書店、二〇一四年) 四頁。
- (40) 孫江「近代知識亟需『考古』——我們為什麼提唱概念史研究?」(『中華読書報』二〇〇八年九月八日)、孫江「語言学転変之後の中国新史学」(同『新史学——概念・文本・方法』第二卷、中華書局、二〇〇八年)、孫江「概念、概念史与中国語境」(同『概念史研究』第一輯、三聯書店、二〇一三年)。
- (41) 唯一概念史研究の方法論に自覚的なのは、在独の中国人学者であった方維規である。方維規『歴史語義学与概念史——關於定義与方法以及相關問題的若干思考』馮天瑜等主編『語義的文化變遷』(武漢大学出版社、二〇〇七年)、方維規『概念史研究方法要旨——兼談中国研究中存在的問題』(黃興濤主編『新史学——文化史研究的再出発』第三卷、中華書局、二〇〇九年)。

- (42) 賀照田「橘逾淮而為枳?——警惕把概念史研究引入中国近代史」(『中華読書報』二〇〇八年九月八日)。概念史研究の論点と問題点を公平な立場から簡潔に指摘した。
- (43) 例えば、黄興濤「近代中国漢語外来詞語の最新研究——評馬西尼『現代漢語詞彙的形成』」(同『文化史的視野——黄興濤自選集』福建教育出版社、二〇〇〇年)。
- (44) 部分訳だが、日本語訳として宮川康子訳「言語横断の実践・序説」(上・下)『思想』岩波書店、八八九号、九〇〇号、一九九九年五月、六月)がある。
- (45) 加藤祐三「解説」(『飯塚浩二著作集二』平凡社、一九七五年)。
- (46) 子安宣邦「昭和日本と「東亜」の概念」(同『アジア』はどう語られてきたのか)藤原書店、二〇〇三年)。
- (47) 溝口雄三・丸川哲史「日本人にとって中国研究とは何だったのか」(孫歌・陳光興・白永瑞編『ポスト(東アジア)』作品社、二〇〇六年)九二頁。
- (48) 羽田正「西アジア」の地域とアイデンティティー」(貴志俊彦・荒野泰典・小風秀雅編『東アジア』の時代性』溪水社、二〇〇五年)一七一頁。
- (49) 「地域概念の政治性」(『アジアから考える「1」交錯するアジア』東京大学出版会、一九九三年)が示唆に富む。
- (50) 荒野泰典は、すこし時期を早めて十七〜十八世紀の交替期に日本人の「アイデンティティー」の拠り所として「東アジア」が「発見」されたという。その後、近代以降になると日本の「生命線」として「東アジア」が語られる、という大胆な見取り図を提示する。荒野泰典「近世日本における「東アジア」の「発見」」(貴志俊彦・荒野泰典・小風秀雅編『東アジア』の時代性』溪水社、二〇〇五年)。
- (51) 一例を挙げれば、田中正美「那珂通世」(江上波夫編『東洋学の系譜』大修館書店、一九九二年)。中国史ではなく、実は元代史の専門家である那珂通世の「東洋史」概念は独特で、一個の研究課題である。吉澤誠一郎「東洋史学の形成と中国」(『帝國日本』の学知「3」東洋学の磁場』岩波書店、二〇〇六年)。
- (52) 浜下武志「近代中国の国際的契機——朝貢貿易システムと近代アジア」(東京大学出版会、一九九〇年)、浜下武志「序 地域研究とアジア」(溝口雄三ほか編『アジアから考える「2」地域システム』東京大学出版会、一九九三年)。

- (53) 茂木敏夫『変容する近代東アジアの国際秩序』（山川出版社、一九九七年）。
- (54) 岡本隆司『近代中国と海関』（名古屋大学出版会、一九九九年）四〇六頁、四七六〜四八〇頁。
- (55) 本野英一「アジア史研究者からの三つの質問」（川勝平太編『グローバルヒストリーに向けて』藤原書店、二〇〇二年）。
- (56) 汪暉「亜細亞想像的譜系」（同『現代中国思想的興起』（下巻、第二部）三聯書店、二〇〇四年）。邦訳（劉正愛訳）「新しい「アジア想像」の歴史的條件」（『岩波講座近代日本の文化史Ⅰ近代世界の形成』岩波書店、二〇〇二年）。
- (57) 孫歌「アジアを語ること——そのジレンマ」（同『アジアを語ることのジレンマ』岩波書店、二〇〇二年）一九二頁。
- (58) 澤井啓一「フィクションをしてフィクションたらしめるために」（『中国——社会と文化』第二十号、二〇〇五年六月）一一頁。同号は「東アジアをいま再考すること」特集号。
- (59) 緒形康「思想課題としてのアジア」を讀む」（『中国——社会と文化』第二十号、二〇〇五年六月）一六〜一七頁。
- (60) 潘光哲『晚清士人的西学閱讀史（一八三三〜一八九八）』（中央研究院近代史研究所、二〇一四年）。
- (61) 王天根『天演論』伝播与清末民初的社会動員』（合肥工業大学出版社、二〇〇六年）。
- (62) 竹内弘行『時務報』東文訳報の考察——古城貞吉が伝えた欧米・日本・中国の状況と思想』（『名古屋大学中国哲学論集』第十三号、二〇一四年）。
- (63) 阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（福村出版、一九九〇年）二二二頁。
- (64) 王汎森「思想資源」与「概念工具」——戊戌前後の幾種日本要素」（同『中国近代思想与學術的系譜』河北教育出版社、二〇〇一年）一六四頁。
- (65) 陶希聖『潮流与点滴』（台北・伝記文学、一九六四年）六四頁。
- (66) 汪暉（村田雄二郎・砂山幸雄・小野寺史郎訳）『思想空間としての現代中国』（岩波書店、二〇〇六年）v頁。
- (67) 葛兆光『中国再考——その領域・民族・文化』（岩波書店、二〇一四年）三〇〜三一頁。
- (68) 清末思想をナショナルリズムの観点から解釈することの妥当性については承知している。小野寺史郎『中国ナショナルリズム——民族と愛國の近代史』（中公新書、二〇一七年）。